

この報せは年が明けた一九〇五年一月二日、水師營で旅順開城交渉が合意成立したという電文と前後して、高野のもとへ届けられている。

その年の夏、ゆいは神戸で女の子を無事に出産した。

産後の床で、彼女はアメリカのポーツマスで日露講和会議がはじまったというニュースを知り心おどらせるのだった。

父親になったソローキンからは何の音信もなかった。が、ゆいにはソローキンが妻子のいる日本へ帰る足音がすぐ耳元まで聞こえてくるのであった。

ヨーロッパに渡ったソローキンの動向については、カザノフが送ってくれた資料から想像する他はない。

旅順陥落後、ペテルブルクやモスク

ワなど各地で工場労働者のストライキが相次いで発生し、ロシア国内には不穏な空気がながれていた。一九〇五年一月九日（露歴）、ロシア革命の発端となったといわれる「血の日曜日事件」はこのような状況下でおこる。

この事件のとき、大衆十数万のデモ行進の先頭に立った僧侶ガポンは、のちに秘密警察オブラーナのスパイであったことが発覚した。ガポンはそのため、日露戦争の一九〇六年四月、かつての仲間だった労働者の手で処刑される。カザノフはこのほどこのガポンが書いたオブラーナへの秘密報告書を手に入れることができた。

それによれば、ガポンは皇帝のいる冬宮への請願行進を組織し実行に移すに先立ち、革命諸政党の代表者と会い協力をとりつけることに成功した。かれはリヴェラル派からは大量の資金、そしてエスエルからは爆弾を手にする。そしてこのとき、ガポンが会談したエスエルの代表者のひとりにソローキンらしき人物の名前がでてくるのである。

この憶測は根拠のないものではなく、明石はすでにロシア国内におけるガポン人気に目をつけ、これを利用しようと画策していた。明石はヨーロッパに潜入したソローキンにまず「ガポン抱き込み工作」への協力を要請したものと思われる。

「血の日曜日事件」から一月後、明石はロンドンでガポンに会い、前年の十月一日のパリ会議をさらに上回る革命勢力の結集を呼びかけ資金の提供を申し出た。

四月二日、ジュネーブでガポン提唱の革命党派代表者会議が前回より多い十一のグループが参加して開かれた。



挿絵 (A. Murayama)

この会議には、社会民主党のボリシェヴィキ・グループからレーニンも参加している。明石工作の一員として、このジュネーブ会議開催の裏工作を担当したソローキンが、このときレーニンに会ったかどうかは定かではないが、ソローキンはレーニンが一九一六年にチューリッヒに移るまでジュネーブに滞在し、社会民主党の機関誌の編集に携わっていたことから、このジュネーブ会議をきっかけにソローキンはエスエルから離れ、社会民主党に接近していったのはたしかなようである。

この後、明石資金が動いたといわれる六月十四日の「戦艦ポチョムキンの乱」や、明石がガポンを代表者にかつぎ、ロシアへの武装輸送を企てた「ジョン・クラフトン号事件」などにソローキンがかかわったものと思われるが、そのことを裏づける資料はまだ見つかっていない。

ただ日露戦争後、ロシアの雑誌『新世紀』は、「ジョン・クラフトン号事件」に日本の駐在武官が深く関与していた事実をすっぱぬき、あわせて日本政府は露日戦争のときに日本軍の捕虜になり、「マツヤマ」に収容されていた革命派の青年士官をジュネーブに送りこみ、亡命中の革命勢力を支援していた証拠があると指摘している。

ところで、ジュネーブに活動の拠点をおいたソローキンは自分が女兒の父親になったことを知りえたのだろうか。

「殉庵日記」には、このことについて何も書かれていない。しかし、おそらく高野から参謀本部をとおして明石のもとへ情報は伝わっていたはずである。ゆいがソローキンの子を産んだことは参謀本部にしてみれば、かれを日本側につなぎとめておくいわばかっこうの絆にちがいがなかった。

またソローキン自身が過激なエスエルから離れ、社会民主党へ近づきやがて穏健派のプレハーノフの門下で活動するようになるという思想的な転換もこのことを暗に示しているように思えてならないのである。

しかし戦後も、ソローキンはジュネーブにとどまった。

ゆいの待つ日本はもとより、故国ロシアへも帰ることはなかったのである。

戦後、ロシア国内では保守反動の専制支配が強まり、革命勢力への弾圧とシベリア流刑がはじまった。一九〇五年の革命に際し、レーニンをはじめ多くの党員がペテルブルクへ帰り非合法に活動していたが、やがて再び国外へ脱出していく。

革命はまだその緒についたばかりだったのである。

この後の十年余り、ソローキンの動向はよくわからない。

カザノフの調査でソローキンの名前が登場するのは、一九一七年のロシアの二月革命のときであった。

ロンドンに亡命していたプレハーノフはロマノフ王朝崩壊後、臨時政府の差

し向けた水雷艇に乗ってペテログラード（旧ペテルブルグ）へ帰ってくるが、このプレハーノフ帰国の際の随員にソローキンがいたのである。かれはこのとき三十七歳、かつて革命に命をかけた青年士官にとって、故国はいままさにその革命の最中であつた。

しかし、レーニンの率いるボリシェヴィキが国家権力を手中にした十月革命に否定的な態度をとったプレハーノフはソヴィエト政権に追われ翌年の五月、フィンランドで客死する。

一方、ソローキンはウクライナのキエフへ逃れ、ここで語学教師の職をえてごく平凡な結婚をした。その後かれはつつましく穏やかな人生を従容として生き一九五五年、七十五歳で他界した。再び日本の土を踏むことはなかったのである。

第二次世界大戦の末期、日露戦争から四十年後、ソヴィエト軍がウスリー江をこえて満州へ侵攻した。そして、六十万人にのぼる日本人捕虜がシベリアの奥地へと抑留される。当然、ソローキンはシベリア各地の収容所で苛酷な労働に従事する日本人捕虜の存在を知っていたであろう。かれは露日の歴史の皮肉な結末をどのような思いで受けとめたのだろうか。

かれは記憶の箱の隅から「マツヤマ」や日本にいる妻子のことをそっと取り出し、いくたびか胸をしめつけられる思いにかられたことであろう。

ところで、「殉庵日記」には『松山収容露国俘虜』のなかのミルスキー中尉逃亡事件の記述に際し、ソローキンの名前を書き誌した理由をつぎのように記している。

「余ノ見ル所ノ露国将校ノ中デモ祖国ノ将来ヲ真摯ニ憂イ品性高ク忠勇無比ナル武士道ヲ抱キシ者ハソローキン唯一人ナリ。然ルニコノ若キ青年士官ノ前途ハ容易ナラザルモノアリ。余ハ欧州デ活動セシ彼ノ名ヲ後世ニ残シ伝エンガ為逃亡事件ノ記述ノナカヘ其ノ名ヲ記セリ」

なおこれはその後の調べで明らかになったことだが、日露戦争が終わって四年後の明治四十二年、ロシアから二名の陸軍将校が来日し、日本国内に散在しているロシア将校の墓の取り扱いについて協議した。

明治政府の担当官は長崎の稲佐一か所に集めるがよかろうと提案した。が、高野はこの提案に強く反対した。露人墓地は歴史そのものであり、現在の我々の平和や繁栄の根源はその歴史に依存している、というのがその理由であつた。

高野はこのとき松山収容所で死没したロシア将兵の名簿を提出した。そして



この名簿はロシアに持ち帰られ、ロシア帝国外務公文書保管所に今日も保存されている。高野がこの名簿のなかに、アレクセイエフ・ユーゲビッチ・ソローキンの名を書き入れておいたことはいうまでもない。

さて、この物語の筆をおくにあたって、カザノフ氏がちかぢか来松することを報せておく。

ソローキンの調査のためキエフへ出かけた氏は、ソローキンの曾孫にあたる家族に会った。

このとき氏は家族から曾祖父の愛蔵品を見せられた。伝えられるところでは、曾祖父はいつも身辺からこの愛蔵品を離すことがなかったという。さらにかれは死に臨んで、「マツヤマ」とゆいのことにふれ、だれか日本へ行く機会があればこの品をゆいかもしくはその家族へ返してほしいと頼んだのだった。

カザノフ氏からこの報せを受けた私はゆいの曾孫にあたる女性がいま松山にいることを伝えた。するとおりかえし、氏から松山を訪れたいという便りが届いたのである。

カザノフ氏が松山を訪れたときの様子は、この物語の番外編として読者のみなさんに紹介したい。

ANAの第一便が、松山空港沖の伊予灘上空へすがたを現した。

澄みきった青空にゆったり大きな曲線を描いて、飛行機は着陸体勢にはいる。翼がちかっと朝日に光る。と、機影は海上から空港へ一直線に進入してきた。

カザノフを出迎えたのは、倉沢啓介と海南新報をはじめとするマスコミ各社、それに松山市と日本赤十字の関係者たちである。

カザノフは三人の随員を伴っていた。一人は通訳であとの二人はロシア大使館の書記官である。

四人のロシア人のなかでもカザノフはひときわ巨漢であった。関係者側を代表し、倉沢はかれと握手をかわした。暑く大きな手である。倉沢はカザノフの手に広大なロシアの大陸を感じた。

一行が最初に訪れたのは祥宗寺だった。境内の墓地の一角にゆいが眠っていた。

焼香し、みんなで手を合わせた。

市が主催したロシア人墓地の慰霊祭は一時間ほどで終わった。

よく晴れて空が高く、マツヤシイの木の梢をわたる風音が心地よかった。

午後、一行はミッション・スクールを訪れた。



挿絵 (E.Hakooka)

学園のある城山は紅葉の錦繡きんしゅうにおおわれていた。

中庭をピアス館のほうへ歩いていくとハンドベルの深い音色が響いてきた。中四国の高等学校のハンドベル演奏会がピアス館で開かれていた。演奏中の曲がホールの外の廊下に聞こえてくる。よく耳にする旋律である。波紋のようにひろがる響きが色鮮やかに紅葉した樹々の奥へにじんできていくようだった。バッハだね、と倉沢が口にした。

一曲、演奏が終わって案内役の理事長がドアを引き、カザノフたち一行をホールへ招き入れた。舞台ではちょうどミッション・スクールの生徒たちが十数人横にならんで、大小様々な大きさのハンドベルを演奏台にならべているところだった。

雅子のすがたはまだ見えない。

用意された席へ案内され、倉沢は通訳をはさんでカザノフの隣に座った。

ざわついていたホールがしんとした。

舞台の袖から指揮者の衣装を着た雅子がすっとあらわれ、客席のほうへ一礼をした。雅子を見たカザノフが思わず小さく声をあげた。

「なんということだ」

カザノフはソローキンの娘を目のあたりにする気がしたのであった。

演奏会のあと一行は理事長室で歓談した。

円卓を囲み、日露戦争へと話は広がった。ニコライ二世に忠誠を誓い二度の逃亡を企てたミルスキー中尉は講話条約後保釈され、仲間の将校たちと一緒に長崎から帰国している。また妻子を松山に呼び寄せた将校の中にはロシアに帰らず、アメリカに渡った家族もいるという。いずれにしろ、戦争が終わって彼らを待っていたのは革命の気運が日毎に高まる故国であった。

倉沢がこんな話を紹介していると紺のスーツに着替えた雅子が入ってきた。

カザノフが立ち上がった。一同もかれにならう。

カザノフは大きな手を雅子へ差し出した。テレビビデオが回り、新聞社のカメラのフラッシュが二人のすがたを華やかに写しだす。

席につくとカザノフは通訳を通してモスクワとペテルブルクならびにキエフへあなたを招待したい、とソビエト赤十字社の意向を雅子に伝えた。

それから、かれは「松山ロシア物語」に書かれていたことと同じ話を雅子にし、鞆から小さな小箱を取り出し彼女の手に握らせた。

「ありがとう」

「スパシーバ」



挿絵 (M.Yada)

カザノフは娘を抱きしめるかのように雅子を抱擁した。

すると雅子の掌ての小箱の中から高く乾いたハンドベルの音色がひとつ、かすかに響いて倉沢の耳をうった。

外はシベリアの空のように晴れ渡っている。